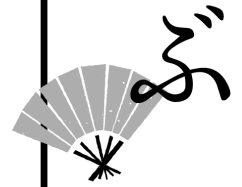


古典落語



に学



落語家

立川談四楼

第四十回 穴子でから抜け

与

太郎が源兵衛さんを訪ね、なぞなぞをやろうと持ちかけます。

「そうか、そんな知恵がついたのか。よし、つきあおう」

「タタじゃ面白くないから、おカネを賭けよう」

「カネを持ってるのか？」

「お父っつあんからもらったばかりだ」

「ではまず一銭ずつ出そう」

「安いけどいいか。ではなぞなぞを出すよ。」

あのね、まっ黒で、大きくて、足が四本あって、角つのがあって、

モーって鳴くのなーんだ？」

源

兵衛さんはあまりにも簡単ななぞなぞに拍子抜けします。

「いいのかそれで？ オレが答えるとおまえは一銭を失うんだ

ぞ」

「うん、いいよ。いちおう賭けだから」

「いいんだな、答えを言うぞ。牛だ！」

「あ、当てられちゃった。しょうがない。この一銭は源兵衛さんにやるよ。じゃあ次のなぞなぞだ」

「あのな与太郎、もう少しヒネったなぞなぞを出せよ」

「大丈夫、今度のはヒネったから。あのね、黒くて、クチバシ

があって、空を飛んで、カーって鳴くのなーんだ？」

「どこをヒネったんだよ。いいのか、この一銭、またオレのものになっちまうんだぞ。いいか、答えを言うぞ。カラスだ！」

「ああ、また当てられちゃった。ヒネったのにな」

「少しもヒネってねえよ」

「今度こそ大丈夫だ、うんとヒネったから。それに一銭じゃ張り合いがないから、これを賭けよう」

「お、一円札じゃねえか。金持ちだな。だけど、これもオレのものになっちまうんだぞ。いいのか？」

「いいよ、さっきも言った通り、うんとヒネったから。じゃあ出すよ。」

長

いのも短いのもあって、太いのも細いのもあって、つかむとヌルヌルするものなーんだ？」

「考えやがったな。オレがヘビだと言ったらおまえはウナギ、オレがウナギと言ったらおまえはヘビと言うんだろう？」

「両方言っているよ。うんとヒネったから」

「本当にいいんだな」

「本当に両方言っているよ」

「よおし、ヘビとウナギだ！」

「えへへ、一円もらった。穴子だよ」



これが『穴子でから抜け』です。から抜けとは「出し抜いてやった」の意で、与太郎は見事に源兵衛さんを出し抜いたわけです。

与太郎は少し知恵の足りない役どころです。ですから源兵衛さんは最初から与太郎を侮あはっていて、その慢心まんしんから与太郎にしてやられてしまったのです。

そ

れにしても今回の、与太郎の高等戦術はどうでしょう。簡単ななぞなぞを二つ出して相手を油断させ、いざとなった時に意表を突くなぞなぞを用意しているのです。これには誰でも引っかけたててしまいますよね。与太郎の面目躍如めんもくやくじょという一席です。

典型的な前座ぜんざ噺ばなしで、与太郎噺のマクラとして使われることもあり、時間がない時には一席としても機能します。私も入門早々に教わり、マクラの小噺として、そして一席として披露したりと、重宝したものです。

『穴子でから抜け』はマクラの小噺として使われるぐらいですから、短いのが特徴です。この噺で初高座を踏んだ人は少ないはずと思っていましたが、楽屋で聞いたところ、何人かの手が上がったことに驚きました。

そして彼らは揃そろって「時間がないから短い噺で降りてこい」と先輩から命じられたのでした。そこは想像した通りでしたね。